

国語

※答はすべて解答用紙に書きなさい。

【問題】 つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

生きがい感というものは、そぼくな形では生命の①きばんそのものに密着しているので、せいぜい生きるよろこび、【A】「生存充実感」としてしか意識されない。②デユマのいうように、ひとの生活が自然な形で営まれているときには、一種の自動性をおびて意識にのぼらない傾向があるからであろう。したがって(1)「あなたは何を生きがいにしていきますか」とたずねても即座に返事のできないひが多い。或る調査用紙にこの質問を入れておいたところ、「この問いをみてギョツとした」という感想をのべた主婦もある。

青年時代に生きがいについて悩むひとはかなりいても、大人になると避けておくのがふつうになる。男のひとは一応まとりもな職業につき、家族を養うことができれば、自分の生活は生きるに値するものと心のどこかで簡単にかたづけられてしまうし、女のひとはなお一層そぼくに、一応平和な家庭を営み、家族そろって健康で仲よく暮せれば、その中心である自分の存在意識を十二分に感じてやすらっている。男のひとにしても女のひとにしても、単に(2)「社会的な役割を果たすだけで人間の生存意識のすべてがみだされるかどうか、一個の独立人格としての存在理由は何か、というような問いは意識にのぼらないのが一般であろう。それは一種の防衛本能のようなものかも知れない。【B】、うっかり本気でこういう問題に立ちむかうならば、今まで安全にみえていた大地に突然割れ目ができ、そこから深淵をのぞきこむような不安や不気味さにおそわれる恐れがあるからである。

【C】長い一生の間には、ふと立ちどまって自分の生きがいは何であろうか、と考えてみたり、自分の存在意義について思い悩んだりすることが出てくる。この時は明らかに認識上の問題となってくるわけで、大まかにいって次のような問いが発せられるわけであろう。

- 一 自分の生存は何かのため、またはだれかのために必要であるか。
- 二 自分固有の生きて行く目標は何か。あるとすれば、それに忠実に生きているか。
- 三 以上あるいはその他から判断して自分は生きている資格があるか。
- 四 一般に人生というものは生きるのに値するものであるか。

このなかで第四の問いは全くの一般論で、論理的にいえば、まずこれが解決されなければあとの問いも成立しえないわけであるが、実際の生活では必ずしもそうではない。第四の問いがわからないままでも、ほかの問いのどれかに対して確信をもって②肯定できれば、大ていのひとはそれだけで結構げんきにいらして行ける。【D】それだけで人生一般にも意味が③賦与されるのである。

はじめの三問のうちでも、第一の「自分の存在は何かのため、またはだれかのために必要であるか」が肯定的に答えられれば、それだけで充分生きがいをもとめるひとが多いと思われる。老年期の④ひあいの大きな部分はこれに充分確信をもって答えられなくなるであろう。したがって、もし老人に生きがい感を与えようと思うならば、なんなり老人にできる役割を分担してもらおうほうがよいし、

また何よりも愛の関係において老人の存在がこちらにとって必要なのだ、と感じてもらおうことが⑤か  
んようとなる。

人間が最も生きがいを感じるのは、自分がしたいと思うことと義務とが一致したときだと思われるが、それはとりもなおさず右の第一問と第二問の内容が一致した場合であろう。しかしもちろんこれは必ずしも一致しない。生活のための職業のほか、ほんとうにやりたい仕事を持っている男のひととか、主婦業以外にぜひやりたいことを持っている女のひとの場合などである。その両立が困難になれば第三問にも良心が責められ、うっかりすると神経症になる者や、反応性うつ病や自殺にいたる例さえある。精神医学の⑥臨床上、重要な問題である。

上にあげた四つの問いに答えるには、すべてある価値の基準が前提となる。その基準は必ずしも意識的な検討を経て採用されるわけではないが、(3)人間はみななんらかの価値体系を採用して生きていくのであるから、それにもとづいてこの問いにも答えることになるだろう。

どのようにしてひとは特定の価値体系を採用するようになるのであろうか。幼年時代に主として両親を通して社会的環境によってこれが与えられるという考えは、フロイトをはじめ多くのひとによってまとめられて来た。そこに文化人類学者たちのいう文化と人格の関連性があるわけであるが、しかしことはそれほど簡単であろうか。家庭や社会から提供されるさまざまな価値体系は、必ずしも単一でなく、統一されてもいない。またある人間が成長して行く途上には、病気とか死とか、予測できない運命が待ちもっていることもあるし、別の生活圏から現われて来た人物との出会いを通して、まったく違った価値体系がもたらされることもある。⑦蓄財を最高の価値として教えられて来た地方の商家の息子が、都会に進学しているうちに師友の感化をうけ、親にそむいて思想運動にいてい身するようになる、といった例は決してめずらしくはない。人間は白紙の状態でまわりから提供されるものをうけ入れるわけではなく、多少とも主體的にそれらのものから自分に最もぴたりするものをえらびとるわけである。それ自体どんなに立派な世界観や思想であっても、うけ入れるひとの心のなかにそれが必然性をもってくみこまれ、心の構造それ自体をつくりあげる決定因子となり、もののみかた、というより、みえかたを変えるようにならなければ、それは借りものにすぎない。借りものである何よりの証拠として、その原理にしたがって生きているつもりになっても、実際に生きがい感はずまないであろう。

【E】生きがいということがとくに認識上の問題になるのはどういうときであろうか。いうまでもなく青年期は一般に、もっとも烈しく、もっとも真剣に生の意味が問われる時期である。若いひとたちに日頃接している者ならば、だれでもおぼえがあらう。いったいどうして勉強などしなくてはならないのか、どうして生きて行かなくてはならないのか、どんな目標を自分の前においたらよいのか、と不安と疑惑にみちたまなざしで問いつめられたことを。このような問いに対してどのような態度をとり、どのような答をなしうるか、ということが親たる者、教師たる者の⑧試金石の一つである。

(4)ところがその青年たちも大人になると、いつしか生存の意味を問うことを忘れ、ただ生の流れに流されて行くようにみえる者が多い。その流れがせかれるようなことでもないかぎり、ふつう壮年期は無我夢中で過ごしてしまい、だんだん年をとって来てそれまでの生きがいがいなくなわれ、生きる目標を変えて行かなくてはならないときに、この問題が再び切実に心を占めることになる。女性の更年期症状といわれるものは、たしかに内分泌系のバランスがくずれするためにひきおこされるものではあるが、そのきわめて多くの部分は生きがいの⑨そうしつという⑩ききによるものと思われる。自

分にはこれからなんの生きるよるこびがあるだろう、なんの値打ねうちが、と問う彼女らの暗たんとしたまなざしには、青年たちのそれとはまたちがう切実さがよみとられるのである。これは何も女性にかぎらず、老人一般の最大の問題であろう。【F】社会保障制度の充実だけで解決のできるものでないことは、北欧の老人自殺率がよく示している。

次に過去と生きがい感の関係を考えてみよう。⑩辛苦の多かった生活のために長い年月の間「我を忘れて」苦闘して来たひとがどうやらそこを切りぬけ、ほっと一息をつくとともに、ふと「我にかえって」過去をふりかえり、当時は無意味と思われた日々のなかにも、やはり何ほどの意味のあったことを見いだし、つくづく生きて来たかいがあつた、とつぶやく場合もある。このような時には、過去のいろいろな出来事のなかでも特に意味ある瞬間が暗い⑪ほうきやくの淵から星のように光って浮かびあがって見える。その時、ひとは自分の過去の歴史に対して一つの選択を行なっているのである。そこに意味を賦与するのは現在の自分であり、現在自分の採用している価値体系なのである。

もし過去の生活がまったく意味のないもの、失敗したものと感じられれば、その無意味感は一とをうちのめしてしまい、現在の生をも無意味に感じさせてしまう。その痛烈な⑫嘆きは「ヴェルレーヌ」が獄舎の窓からむこうにみえる平和な空の色と街の屋根を眺めて歌った詩ににじみ出ている。

どうしたのか、おお　そこで

たえず涙をこぼしているお前よ

言え、そこにいるお前よ

自分の青春をお前はどうしたのか

しかしこの過去に対する無意味感が、かえって一つのばねばねとなって、なんとかして今後の自己の生を意味あるものにしてしようという烈しい意欲をひきおこし、それが時にはひとをおどろかすような突然の生活変化をもたらすことがある。フランス一七世紀悲劇作家ラシヌが人気の絶頂にあつたとき、しかも三七歳という壮年に突然劇作の筆を折り、敬虔かつ⑬へいぼんな生活に引退してしまったのはそのいい例である。その解釈はいろいろにいわれているが一つの価値の転換が行われたことは明らかである。ラシヌが採用した新しい価値基準から判断すれば彼の過去の輝かしい文学的業績のわずかずも、みな彼のいう「一五年間の迷いと悲惨」の一部として数えられてしまったわけである。

(一九八〇神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房　より。ただし、一部改変した。)

(注1) デュマ Ⅱ ジョルジュ・デュマ。フランスの心理学者、生理学者。一八六六～一九四六。

(注2) ヴェルレーヌ Ⅱ ポール・ヴェルレーヌ。フランスの詩人。フランス象徴派の代表的存在。

一八四四～一八九六。

問一 傍線部①から④の漢字にはひらがなで読みをつけ、ひらがなは漢字に直しなさい。

問二 【A】から【F】にあてはまるものを次のなかから選んで入れなさい。

しかし  なぜならば  ところで  いわゆる  または  つまり

問三 本文中に傍線部(1) 『あなたは何を生きがいにしていますか』とたずねても即座に返事のできないひとが多い。」とあるが、それはなぜですか。七〇字程度で理由を答えなさい。

問四 本文中に傍線部(2) 「社会的な役割を果たす」とあるが、それはどういうことをさしていますか、五〇字程度で説明しなさい。

問五 本文中に傍線部(3) 「人間はみななんらかの価値体系を採用して生きています」とあるが、それはどういうことですか。傍線部(3)の次の段落(「どのようにして」～「うまれないうであろう。」「から、一〇〇字程度で説明しなさい。

問六 本文中の傍線部(4) 「ところがその青年たちも大人になると、」以降の部分を読んで、ひとが老年期に生きがいを感じるとはどういうことなのか、くわしく説明しなさい。

問七 この文章についてのあなたの意見や感想を二〇〇字程度で自由に書きなさい。